

## 研究デザインの方法：量的アプローチと質的アプローチ

大阪教育大学

本田勝久(honda@cc.osaka-kyoiku.ac.jp)

高木亜希子(takagi@cc.osaka-kyoiku.ac.jp)

### 0. 要旨

英語教育に関する研究を行うとき、研究者は、まずどのような理論的視点に立ち、研究を行うか明確にした上で、研究計画を立て、目的に合った研究手法を選択することが必要である。研究者が、実証主義的な(positivist)視点に立てば、客観性、予測、反復可能性を重視し、科学的一般化や現象を説明する法則を明らかにすることが目的となる。そのためには、実験研究や質問紙調査などの方法論(methodology)を選択し、測定や選択式質問紙などの量的手法(method)でデータを収集して、統計的な分析を行うことになるだろう。また、解釈的な(interpretive)視点に立てば、現実に存在する人間の経験、思想や感情を、十分に理解しようとするのが目的になる。そのためには、現象学的研究、エスノグラフィ、グラウンデッド・セオリーなどの方法論を選択し、面接、記述式質問紙や参与観察法などの質的手法でデータを収集して、質的な分析をすることになるだろう。

本セミナーでは、まず理論的視点を概観した後、具体的な研究テーマを例として、それぞれの視点から研究を行う場合の研究デザインの方法について提示する。具体的には、(1)リサーチ・クエスションの設定、(2)データ収集の方法、(3)データ分析の方法、(4)研究の評価に関して、質的アプローチと質的アプローチで比較しながら、それぞれ提示する。前半の量的アプローチは本田が担当し、後半の質的アプローチは高木が担当する。量的・質的アプローチを比較・分析することで、研究課題に沿った研究デザインのあり方を議論したい。

### 1. 理論的視点

研究デザインを行う際に、研究者が立つ理論的視点・枠組み(paradigm)は大きく3つに分類される。

実証主義的視点(positivist/scientific paradigm)

人々の行為には普遍的な法則・規則がある。客観性、予測、反復可能性を重視し、因果関係を説明するための調査を目的とする。科学的で実験主義的な調査を通して得られた知識は客観的で定量的であり、現実世界(reality)は静的で観察・測定可能なものである。

解釈主義的視点(interpretive paradigm)

人々の経験は文脈に縛られており、時、場所、人間という行為者の心と切り離すことはできない。多元的な現実世界(reality)は人々により社会的に構築されている。参加者の行為や経験、教育のプロセスの意味を探究し理解することを目的とする。

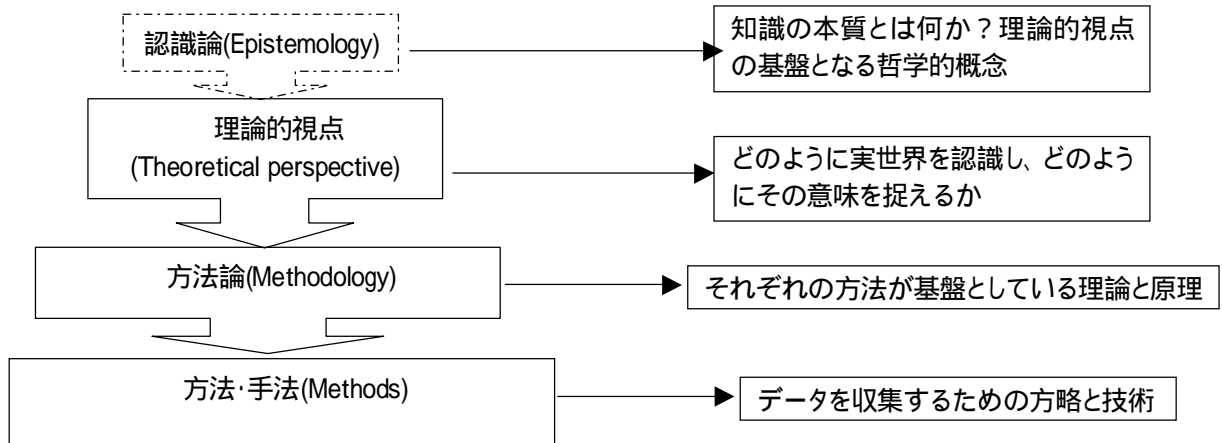
批判的視点(critical paradigm)

客観的や中立的な知識は存在せず、知識は常に社会的利害に影響されている。人間の行動を解釈し、理解するだけでなく、社会的批判をすることで、社会的あるいは組織的な変化を起こすことを目的とする。

## 2. 研究計画

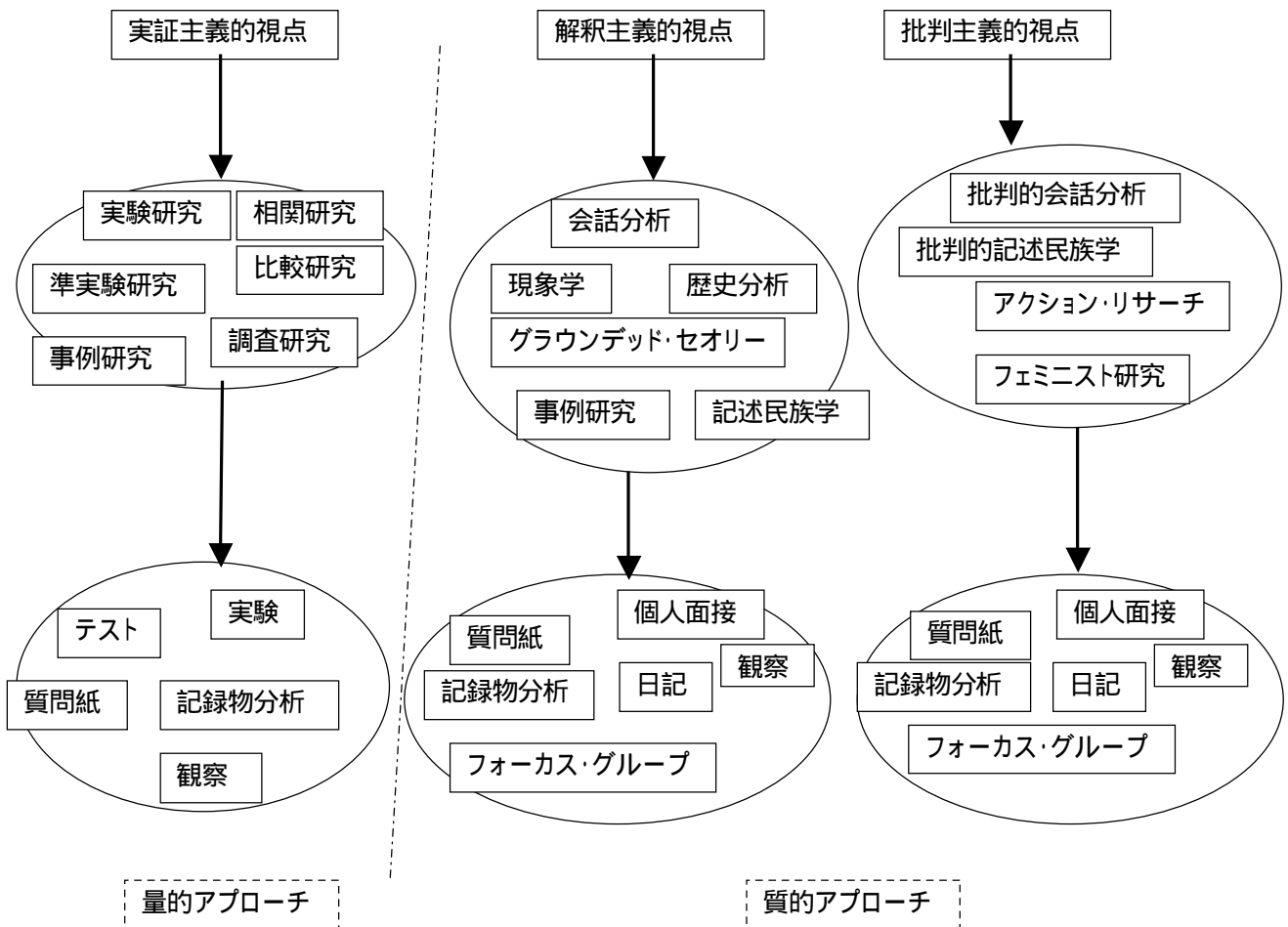
### 2.1 研究計画に関わる4要素

研究計画を立てるときに以下の4つの要素について認識しておく必要がある。



Crotty (1998, p.4)より

### 2.2. 量的アプローチと質的アプローチ



### 3. 研究課題の設定

#### 3.1 一般から特定へ

教師としての経験や関心(あるいは勘) 日々の教育実践の中で抱く疑問や課題から



測定される特定の変数の用語によって具体的に言い表されたものへ

- ・研究論文は、研究課題が興味を引くに足ることを立証しなければならない。
- ・研究課題は、その研究が適切かつ重要であり、新たな寄与をおこなうものであることを示さなければならない。

「目的」はその研究の目標についての一般的な表現

「仮説」はその実験で起こると思われることについてのより特定化した予想(量的)

(一般)学生が好んで選択する心理学のコースは、教える講師のタイプと関係があるか

(特定)個人的・社会的なスキルを強調する講師は、臨床のコースでより好まれるか

分析的・客観的なスキルを強調する講師は、実験的なコースでより好まれるか

(Findlay 1993, p. 17改訂)

#### 3.2. 先行研究から

・関連文献を探す(雑誌論文, 電子ジャーナル, 人と人とのコンタクト etc.)

学習者要因に関する多くの研究論文は、*The Modern Language Journal*や*Language Learning*に代表されるSLAの主なジャーナルにも掲載されている。

・関連文献をまとめる(文献目録, コンピュータのデータベース etc.)

「対象者の属性」「何がなされたか」「何がわかったか」「どのような結論になったか」などの関連文献ごとのリストを作成する。

・用語を整理する(検索エンジン, 用語辞典 etc.)

questionnaires, inventories, forms, tests, batteries, checklists, scales, surveys, schedules, studies, profiles, index/indicators, sheets, etc.

先行研究の追試や先行研究への疑問から研究課題が見つかることも...

#### 3.3 自分なりの研究課題の設定へ

(1)位置づけができること→先行研究から自分の研究はどのような位置づけになるのか?

(2)オリジナリティがあること→先行研究との違いは何か?単なる追試になっていないか?

(3)検証可能であること→無理な課題設定はしていないか?変数の統制や条件は整備できるか?(量的)

先行研究では

(1)何が主張されていて..

(2)何がわかっている..

研究課題では

(1)何を知らなければならないのか..

(2)何を知らることができるのか..

研究方法の決定へ

では、  
どのようにしたら、  
知ることができるか?

## 4. 量的アプローチによるリサーチ・デザイン: 調査研究

### 4.1 調査研究とは？

#### 実験研究 (experimental study)

特定の事象・現象を分析する目的のために、人為的に整えられた条件(例: 実験(experimental group)・統制群 (control group))のもとで、特定の道具や装置を用いた実験を行い、そこで得られる実験結果を分析するもの。

#### 調査研究 (survey)

観察、検査、アンケート、面接などを行いそれによって得られた資料を分析するもので、人為的な条件は設定しない。

白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (1999, p.261)

観察によるもの 「見ること」により学習者を理解しようとするもの

・観察法: 学習者の行動を観察・記録・分析し、行動の質的・量的特徴や行動の法則性を解明すること

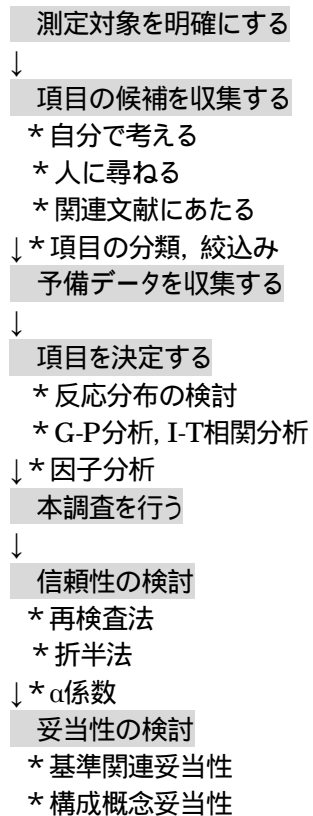
言語を媒介とするもの 「聞くこと」により学習者を理解しようとするもの

・質問紙法 & 面接法: 行動そのものよりも学習者の感情や価値観、動機など、心の内面を理解すること

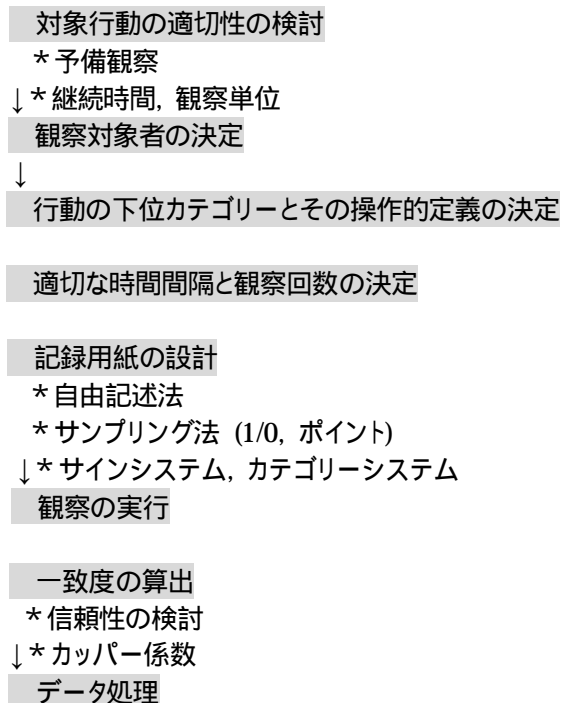
### 4.2 研究手法の決定

リサーチ・デザインを決定する際、選択する研究手法によりプロセスが異なることに留意する。

例えば...質問紙法では、



例えば...観察法では、



これらのプロセスを視野に入れて  
リサーチ・デザインを決定するのが望ましい...

(1)調査対象を定義する→調査目的や方法に応じて調査対象の範囲を想定し、直接の調査対象者(サンプリング)と母集団との関係を決定すること

(2)調査内容を吟味する→調査内容の候補を収集・精選し、予備調査や分析(信頼性&妥当性)などを通して実際の調査項目を作成すること

(3)調査方法の種類を知る→いろいろな調査方法の短所と長所を知り、研究課題や時間・労力・資金などに合わせて調査方法を選択すること(面接調査, 集団調査, 委託調査, 郵送調査 etc.)

(4)分析手法やデータ処理を予測する→調査対象者の数やその構成(性別・年齢)、調査項目への回答の分布、欠損値の有無などのデータ内容の記述統計的な概略から、データの集計と統計的分析手法を予測すること(質的・量的データ, ノンパラメトリック検定 etc.)

(5)倫理の問題を考慮する→調査対象者とのあいだに信頼関係を築き、人間尊重の精神で調査を実施すること(説明と同意, プライバシーの保護, 結果報告, データの保存または破棄 etc.)

「はじめに研究手法ありき」「ただやっているだけ」ではなく、まずは自分の研究課題をじっくり明らかにすることから、「よい良い研究手法」を決定して欲しい...

## 4.3 データ処理

### 4.3.1 統計を用いたデータ処理の5つの条件(なぜデータ処理をするのか?)

Systematic Research: A statistical study has a clear structure with definite procedural rules that must be followed.

Logical Research: The rules and procedures underlying these studies form a straightforward, logical pattern - a step-by-step progression of building blocks, each of which is necessary for the logic to succeed.

Tangible Research: Statistical research is tangible in that it is based on the collection and manipulation of data from the real world.

Replicable Research: Statistical research should be also replicable. The researcher's proper presentation and explanation of the system, logical data collection, and data manipulation in a study should make it possible for the reader to replicate the study (do it again under the same conditions).

Reductive Research: Statistical research can reduce the confusion of facts that language and language teaching frequently present, sometimes on a daily basis.

(Brown 1988, pp. 4-5 参照)

### 4.3.2 記述統計と推測統計(統計における基礎的な述語とは?)

変数, 構成概念, 独立変数, 従属変数, 母集団, 標本, 検定, 統計的有意, 危険率, 水準 etc.

→記述統計(descriptive statistics): 標本のcentral tendencyとdispersionを調べること  
平均, 分散, 標準偏差, 尖度, 歪度, z得点/偏差値, 中央値, 最頻値, パーセンタイル etc.

→推測統計(inferential statistics): 標本のnormal distributionから母集団を推測すること  
正規分布, 等分散検定, 5%水準, 片側&両側検定, 対応ありと対応なし, 繰り返し要因 etc.

- (1)パラメトリック検定:母集団の数理的特性を推定し、母集団の分布型についての仮定を含める検定(母集団が正規であることを前提とする)→t検定, 分散分析, ピアソンの相関係数 etc.  
 (2)ノンパラメトリック検定:標本の統計的特性から、母集団の分布が特定の形であることを前提としない検定(分布にかかわらない統計法)→ $\chi^2$ 検定, マン-ホイットニーの検定 etc.

#### 4.3.3 相関研究とカテゴリカルデータ分析

カテゴリカルデータとは、相互に排他的なカテゴリーに分類されたデータで、数量としての意味をもたない数字や、記号によって示される名義尺度上のデータをいう。

数量として平均値や標準偏差を求めない 母集団について特別な仮定をもたない  
 ↓でも...  
 そのカテゴリーが量的に変化に沿って設定されていて、量的な意味を完全に失っていない場合には、量的なデータとしてそれに対応する分析を行うこともある。  
 ↓重要なのは...  
**尺度 (scale) が決まれば 検定 (test) が決まる**  
 4つの尺度の使い分け、差の有無、関係の有無

例えば...関係の検討(分析type )では、  
 名義尺度→ $\chi^2$ 検定, 順序尺度→順位相関係数, 間隔&比尺度→ピアソンの積率相関係数etc.

		大小	加算
名義尺度 (nominal scale)	性別, 職種, 所属クラブ, 好きな食べ物 etc.	×	×
順序尺度 (ordinal scale)	満足度, 階級, コンテスト順位(1<2<3) etc.		
間隔尺度 (interval scale) 比尺度 (ratio scale)	身長, 体重, 年齢, 金額, 試験成績, 等間隔に点数化された回答 etc.	(順序)	(平均)

#### 4.4 例題

これまでのセミナーでは、 $\chi^2$ 検定、ウイルクソンの順位和検定、重回帰分析、スピアマンの順位相関係数、対応ありのt検定、1元配置の分散分析と異なった検定を取り上げてきた。本セミナーでは、昨年度の分析手法を取り上げ、分析方法の違いについて解説する。これまでの分析結果および本年度の発表資料などは、浦野 研(北海学園大学)先生のHPからダウンロードできるので、ご参照頂きたい。

<http://www.urano-ken.com/research/seminar/>

##### 4.4.1 対応ありのt検定 (dependent t-test)

mouth movement の提示は学習者の音素の識別に有効であると考えている N 先生は、「音声だけを用いた学習よりも音声と映像を併用した学習の方が音素の識別には有効である。」ということを実証するために、以下のような実験を試みた。まず、被験者である大学生40名をTOEIC(listening section)のスコアによって均等になるような2つのグループ(音声だけを用いた学習をするグループ:G1)と、音声と映像を併用した学習をするグループ:G2)に分類した。さらに、弁別が困難であるといわれる /æ/, /ʌ/, /ɑ:/, /θ/ の4母音を取り上げ、それぞれの音素を識別する pre-test を実施した。pre-test は音声テープにより1問30秒(15秒×2回)で計40問であった。両グループの違いが「音声」と「音声+映像(ビデオテープ)」になるように、それ以外の変数はできるだけ統制するような授業を4週間にわたって行った。最後に、post-test として pre-test と同じテストを実施し、以下のようなデータが得られた。

データ表

(G1)				(G2)			
No	Listening	Pre-test	Post-test	No	Listening	Pre-test	Post-test
1	155	25	22	1	80	16	19
2	185	28	38	2	155	14	17
3	125	18	10	3	240	45	43
4	150	28	29	4	125	18	25
5	180	37	33	5	145	29	36
6	115	9	19	6	140	19	16
7	95	23	20	7	195	29	33
8	165	37	44	8	165	25	31
9	120	16	18	9	25	12	15
10	185	41	40	10	125	27	29
11	95	7	10	11	205	21	33
12	145	10	8	12	150	16	13
13	175	12	15	13	55	10	15
14	85	17	13	14	145	15	26
15	180	33	35	15	145	21	39
16	95	18	19	16	250	27	44
17	155	41	38	17	120	33	45
18	115	10	12	18	120	18	24
19	135	16	14	19	145	27	37
20	205	29	21	20	110	19	30

どのような統計処理をしたらよいのでしょうか？また、N先生の考えは支持されたのでしょうか？

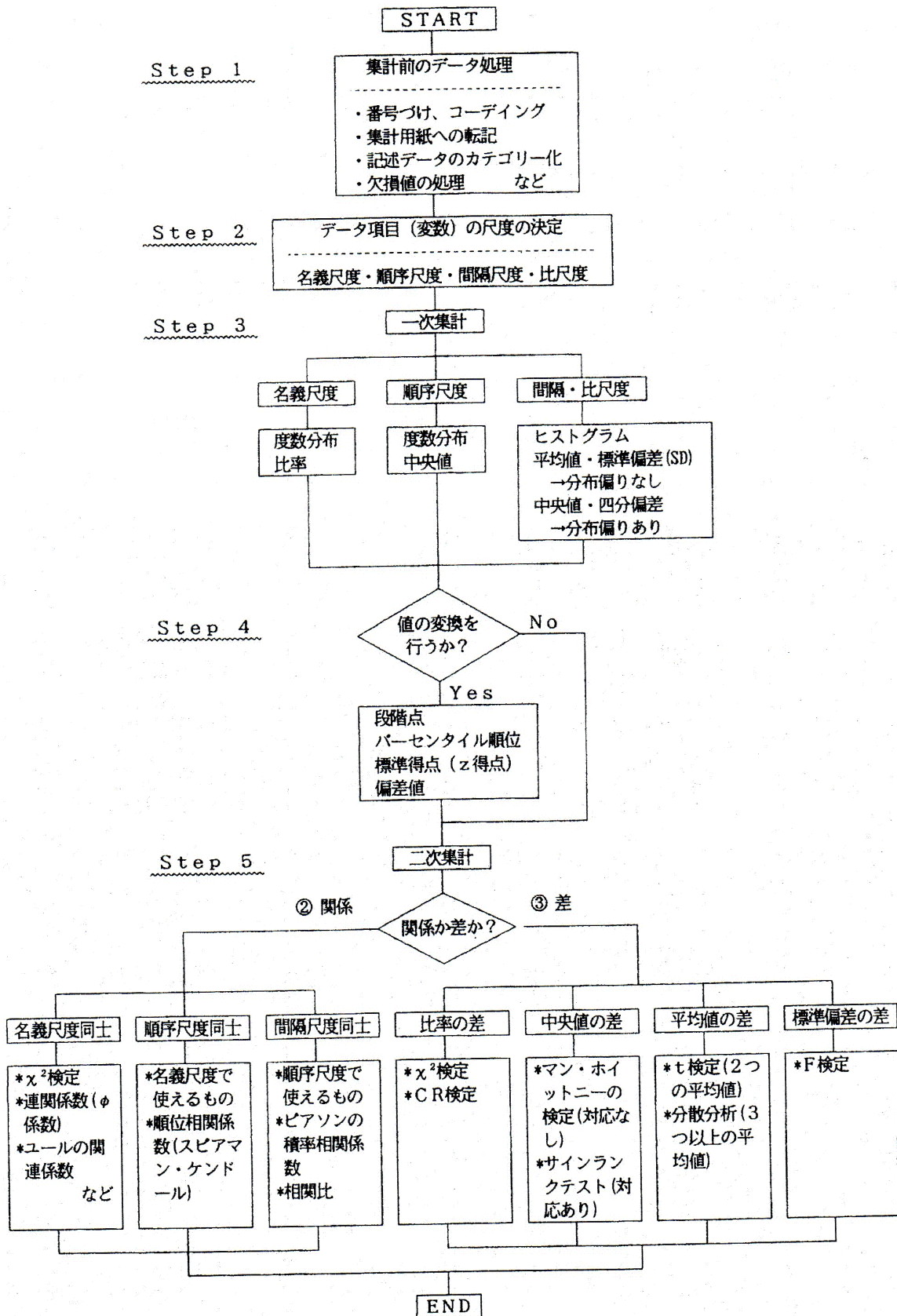
4.4.2 1元配置の分散分析 (one-way ANOVA)

「リーディングテキストにおける未知語の推測は、学習者の語彙のリテンションに効果的である」と考えているH先生は、4週間にわたって次のような調査を行った。まず、Nation (1990) のVocabulary Levels Test (2,000-3,000 word level) を30人の大学生に実施し、それぞれ10人からなる語彙力において等質な3グループを作成した。それら3つのグループに異なるインストラクションの授業 (Group1: vocabulary guessing, Group2: vocabulary glossing, Group3: accessing dictionaries) を行い、vocabulary test を4週間後に実施した。このvocabulary testは、Flesch grade level 14のリーディングテキストから、パイロットスタディとして学習者が未知語として選出した29語の中から16語をターゲットとして作成されたものである (correct=1, incorrect=-0.33, I don't know=0)。それぞれのグループにおけるvocabulary testの結果は以下の表のとおりであった。はたして、H先生の考えは支持されたのであろうか。

Group 1		Group 2		Group 3	
Nation's Vocabulary Test	Vocabulary Test (4週間後)	Nation's Vocabulary Test	Vocabulary Test (4週間後)	Nation's Vocabulary Test	Vocabulary Test (4週間後)
25	43.6	24	27.4	24	18.3
28	56.8	23	38.9	36	21.7
31	27.3	31	59.4	30	29.5
19	35.0	42	43.2	26	15.6
40	48.4	18	15.9	18	9.7
32	42.4	15	22.2	14	16.0
23	25.3	24	52.4	20	7.5
19	51.7	27	28.9	42	31.7
20	31.4	21	30.6	37	13.4
22	29.1	28	25.7	31	22.9

上記の研究・デザインやデータはあくまで架空のものです。

#### 4.5 データ処理の手順





## 5. 質的アプローチによるリサーチ・デザイン: 事例研究

### 5.1 事例研究とは？

#### 事例研究 (case study)

事例研究は、「プログラム、出来事、ひと、プロセス、施設、社会グループといった、ある特定の減少についての調査」である。Bromley(1986)は、ケースを「定義可能な境界のある、自然な出来事」と記しており、事例研究は、この出来事に対して、深く、意図的で、鋭い焦点を投げかける探究である。研究者は、一般的なことより特定の出来事に関心があり、全体論的アプローチから、ケースを文脈の中に当てはめて考える。

C.ウィリッグ(2003)、ホロウェイ・ウィラー(2000)

### 5.2 研究課題の設定

#### 量的アプローチでは

既存の理論から引き出される主張により仮説を立て、実証的な証拠と対照して試される。仮説は棄却されるか、保持されるものである。

例1: 音声だけを用いた学習よりも音声と映像を併用した学習の方が音素の識別には有効である。

例2: リーディングテキストにおける未知語の推測は、学習者の語彙の保持に効果的である。

#### 質的アプローチでは

何を発見できるかを予測するものではなく、ある方向を示すものである。オープン・エンドなもので、研究のプロセスの中で変化することも受け入れる。

例1: 文法が得意な英語学習者とそうでない学習者の違いは何か。

例2: 高校英語教員はリーディング指導にどのような信念を持っているか。

### 5.3 研究手法の種類

#### 5.3.1 面接

研究参加者から生活や経験のある側面について話を聞くことができる。面接者と参加者の間のやりとりによる相互作用で、研究課題に対する答えるデータを引き出すとともに、研究者に新しい洞察を生み出させる。

##### 構造化面接(structured interview)

前もって用意された質問項目に従って、面接を行う。参加者には同じ質問を同じ順序で質問していく。面接時間を短縮し、面接者の影響を抑えることができるが、反応を方向付けてしまう。

量的アプローチで用いられるが、質的アプローチではほとんど用いられない。

##### 半構造化面接(semi-structured interview)

おおざっぱに構成された質問項目を用意するが、質問の順序は参加者によって変えることができ、参加者の反応によって、質問を発展させることもできる。

##### 非構造化面接(open-ended interview)

研究課題に関する一般的な質問を行う。面接者は自由に参加者に質問を行うことができる。

### 5.3.2 フォーカス・グループ

研究参加者の相互作用を利用するグループ面接で、研究者はディスカッションを進める議長役となる。グループのフォーカス(質問、写真、ビデオなどの刺激)を紹介し、研究参加者の発言に応答しコメントすることで、データを形成、発展させることができる。

### 5.3.3 観察

人工的な状況をつくるのではなく、自然な状況において、内部の人の意味の世界を経験し、観察された人々の社会的現実を検証する。量的アプローチにおける観察は、体系的で頻度やパターンをコード化、カテゴリー化して、記録を行い数値的な処理をする。質的アプローチでは、濃密で詳しい記述(thick description)が必要であり、発話、非言語コミュニケーション、出来事が起こった時間、環境や雰囲気、観察者のコメントなどをできるだけ詳細に記述する。

#### 完全な観察者(complete observer)

研究者ということを述べずに、その場に参加せず、状況に影響を与えずに観察を行う。

#### 参加者としての観察者(observer as participant)

研究者ということを明らかにして、観察者としてその場に参加する。

#### 観察者としての参加者(participant as observer)

既に参加者として関わっている場において、研究者ということを明らかにするとともに、観察者としての役割を説明して観察を行う。

### 5.3.4 観察質問紙

量的アプローチでは、選択式質問項目で、統計的な処理を行うが、質的アプローチでは、記述式質問項目でオープン・エンドの回答を記入してもらい、面接の基礎データにしたり、記述をラベル化、カテゴリー化して分析を行う。

## 5.4 研究対象者の選択と倫理的考慮(ethical consideration)

### 5.4.1 研究対象者の選択

質的アプローチにおける「参加者(participant)」、「情報提供者(informant)」は、量的アプローチの「被験者(subject)」の役割と大きく異なる。量的アプローチでよく使用される無作為抽出や確率標本抽出ではなく、場所や時間も考慮し、研究の目的に合った対象者を意図的に選択する。

### 5.4.2 倫理的考慮

質的研究では、特に研究参加者の倫理的な考慮に注意する必要がある。

#### インフォームドコンセント

研究者は、研究参加者にデータ収集を行う前に完全に研究の手続きについて情報を与え、研究に参加する承諾を得なければならない。

#### 欺いてはならない

研究参加者を欺くことは絶対に避けなければならない。

#### 辞退する権利

研究参加者が罰を恐れることなく自由に参加を辞退できなければならない。

### 説明責任

研究者はデータを収集した後で、研究参加者に研究全体の目的について知らせなければならない。

### 守秘義務

研究者は、研究のプロセスにおいて研究参加者について得られたいかなる情報に対しても、完全な守秘義務を守らなければならない。

C.ウィリッグ(2003, p25-26 改訂)

## 5.5 研究事例

### 5.5.1 リサーチ・デザイン

研究課題: A公立高校における英語教員がリーディング指導にどのような信念をもっているか?

研究対象者: A公立高校の英語教員3名

研究方法: 事例研究

研究手法: 授業観察と半構造化面接

研究分析方法: 質的内容分析(コーディングとカテゴリー化)

研究手順:

各参加者のリーディング授業(3年生の授業、各3回)の観察を行い、フィールドノートを取るとともに、ビデオ撮影を行う。

授業終了後、研究者はフィールドノートを見直すとともにビデオを視聴し、なぜ授業中にある活動をとったか/ある行動をとったか尋ねるために、半構造化面接で用いる質問を準備する。

参加者とともに、ビデオを視聴し、半構造化面接を行う。面接は録音する。

ビデオと面接のテープを起こし、質的内容分析を行う。

分析結果を参加者に戻し、各参加者の信念を表すものとして分析が正しいものか確認してもらうとともに、修正・加筆してほしい部分を尋ねる。(Member checking)

### 5.5.2 質的内容分析(コーディングとカテゴリー化)

Step1 最初のコード化(レベル1)

データを部分に分けて検討し、概念化するのが、コード化である最初のコードは暫定的なものであり、分析の段階を経て修正、変換される。最初のコードでは、具体的、事象的コードをつけていく。思いつくコード、具体的、事象的コードをつけていく。

Step2 理論化のための検討(カテゴリー化)

似たような特徴をもつ概念のグループにコードをまとめて、カテゴリー化する。この段階でカテゴリーを表す抽象的なコードをつける。

## 5.6 三角測量(triangulation)

ある研究を様々な視点から見るために、複数の方法を用いること。

・ 理論のトライアングレーション

一つの課題に対する研究で異なった理論的見方を適用する。

・ 方法のトライアングレーション

2つ以上の異なった方法を用い、一つの方法によって得られた知見を別の方法によって確かめる。

・ データのトライアングレーション

異なったグループ、異なった場、異なった時期からデータを得る。

・ 研究者のトライアングレーション

2人以上の研究者が研究を行う。

## 6. 研究の評価

研究の評価を行う際には、量的アプローチ、質的アプローチそれぞれに適した判断基準で、研究の評価を行う必要がある。

### 研究の判断基準

量的アプローチ	内的妥当性 (internal validity)	外的妥当性 (external validity)	信頼性 (reliability)	客観性 (objectivity)
質的アプローチ	信用性 (credibility)	移転性 (transferability)	信憑性 (dependability)	確証性 (conformability)

### 量的アプローチ

#### ・ 内的妥当性

測定したい対象が性格に測定できているか。データから結果が導けるか。

独立変数(原因となる変数)と従属変数(結果となる変数)の間の因果関係について、その因果関係が存在するという記述(因果検証)

#### ・ 外的妥当性

結果がどれだけ一般化できるか。条件を変えて研究をしても同じ結果が得られるか。

研究結果の一般化可能性(研究の結果がどの程度一般的なものであるか)を確認。異なる被験者や違う状況設定での追試実験(一度きりの結果を一般化していないか)

#### ・ 信頼性

結果に一貫性があるか。同じ調査方法で、同じような結果が得られるか。

同じ測定を同じ被験者や同じ状況で実施した時、何度やっても同じ結果になるかという検査法の一貫性。信頼性の測定法として再検査法(ある検査を日時をおいて2度施行した場合の相関)。信頼性の指標として信頼性係数(coefficient of reliability: 例として Cronbach )。内的整合性の検証としての 係数。

#### ・ 客観性

中立的で偏りが無い。

あらゆる被験者や場面に適応する測定。採点者の個人的判断が採点に影響していないこと。客観的検査として、真偽法、多肢選択法、組み合わせ法、完成法。

### 質的アプローチ

#### ・ 信用性

データは信頼できるものであるか。

研究参加者との長いかかわり、長期的な観察、トライアングレーション、研究者仲間によるデータ分析・結果の評価、参加者による分析データのチェック

#### ・ 移転性

ある特定の研究データや結果をその質的研究が当てはまる母集団に移転して読み取れるかどうか。

研究結果を他に移転して適用できるか評価できるように、研究の理論的枠組みについての十分な記述

#### ・ 信憑性

研究が明解であるか。

読者が研究の理論とプロセスを辿れるように、研究プロセスの十分な記述(理論、方法論、分析方法の選択をどのように行ったか)

#### ・ 確証性

研究の結論や解釈がデータから直接引き出されていることが読者に確かめられるか。

研究方法・プロセス・分析結果の十分な記述

## 7. 推薦文献

### 【本田推薦】

#### 英語教師のための研究法の必読書

Hatch, E., & Lazaraton, A. (1991). *The research manual: Design and statistics for applied linguistics*. Boston: Heinle & Heinle.

Brown, J. D. (1988). *Understanding research in second language learning: A teacher's guide to statistics and research design*. Cambridge: Cambridge University Press.

\_\_\_\_\_ (2001). *Using surveys in language programs*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dörnyei, Z. (2003). *Questionnaires in second language research: Construction, administration, and processing*. London: Lawrence Erlbaum Associates.

Bachman, L. F. (2004). *Statistical Analyses for Language Assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.

英語教師のための研究法の必読書として上記の5冊を推薦したい。リサーチ・クエスチョンの設定から変数の扱い、名義尺度やノンパラメトリック検定を含む統計手法の意義などが解説されている。言語テストや動機づけ研究の第一人者からのメッセージは、傾聴に値する。

#### 最近出版された研究法書籍

Mackey, A., & Gass, S. (2005). *Second Language Research: Methodology and Design*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Ellis, R., & Barkhuizen, G. (2005). *Analysing Learner Language*. Oxford: Oxford University Press.

Wall, D. (2006). *Studies in Language Testing 22: The impact of high-stakes testing on classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.

比較的新しい書籍としては上記の3冊を推薦したい。Mackey & Gassは、リサーチ・クエスチョンの設定からデータ収集、さらにはコーディングからレポート作成におけるチェックリストまで、質的・量的手法ともかなりを網羅した内容になっている。Ellis & Barkhuizenは、SLAのアプローチにもとづく分析を紹介している(Computer-based analysesはMichael Barlow)。Language TestingシリーズのAppendixの豊富さには驚かされる(今回はスリランカのプロジェクト、他)。

#### リサーチデザインの設定

三浦省吾 (監修) 前田啓朗・山森光陽 (編) 磯田貴道・廣森友人 (2004) 『英語教師のための教育データ分析入門』東京:大修館書店

清川英男・濱岡美郎・鈴木純子 (2003) 『英語教師のためのExcel活用法』東京:大修館書店

リサーチ・デザインの設定に役立つものとして上記の2冊を推薦したい。英語教育の事例が紹介され、実践に即したデータを使って解説されている。Q & A集や使用するソフトの情報源が掲載され、実証研究に取り組む人にとってはイメージがつかみやすい構成になっている。

#### 心理学研究法

中澤 潤・大野木裕明・南 博文 (編) (1997) 『心理学マニュアル 観察法』京都:北大路書房

鎌倉雅彦・宮下一博・大野木裕明・中澤 潤 (編) (1998) 『心理学マニュアル 質問紙法』京都:北大路書房

大野木裕明・中澤 潤・保坂 亨 (編) (2000) 『心理学マニュアル 面接法』京都:北大路書房

C. ウィリッグ (著) 上淵 寿・大塚まゆみ・小松孝至 (訳) (2003) 『心理学のための質的研究法入門[創造的な探求に向けて]』東京:培風館

心理学研究法の入門書としては上記の4冊を推薦したい。それぞれの手法における基本的な問題だけ

でなく、集計や統計的解析、尺度構成や信頼性の検討などの問題も含んでいる。『心理学マニュアル』シリーズとして『要因計画法』や『事例研究法』に関するものも刊行されている。

#### 心理統計法の解説書

山内光哉 (1998) 『心理・教育のための統計法<第2版>』東京:サイエンス社

森 敏昭・吉田寿夫 (1990) 『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』京都:北大路書房

山田剛史・村井潤一郎 (2004) 『よくわかる心理統計』京都:ミネルヴァ書房

心理統計法の解説書としては上記の3冊を推薦したい。分布や平均の意味からノンパラメトリック検定まで詳細に解説されている。多変量解析は少ないが、特に分散分析については大変詳しい。さらなる分析手法を望む場合には、分野別の解説書が必要となるので注意して欲しい。

#### 統計手法解説書

市川伸一・岸本淳司・大橋靖雄・浜田知久馬 (1993) 『SASによるデータ解析入門<第2版>』東京:東京大学出版会

石村貞夫 (2001) 『SPSSによるカテゴリカルデータ分析の手順』東京:東京書籍

柳井久江 (2004) 『4 Stepsエクセル統計<第2版>』東京:オーエムエス出版

統計パッケージ関係としては上記の3冊を推薦したい。使用するソフトによって使い分けをして欲しいが、いずれもデータの読み方を知る上では有用な本である。統計の知識がないと理解しにくい部分もあり、マニュアルやプログラムの掲載本として活用して欲しい。

#### 英語教育・統計用語辞典

石村貞夫・デズモンドアレン (1997) 『すぐわかる統計用語』東京:東京書籍

白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (1999) 『英語教育用語辞典』東京:大修館書店

Longman (2005). *Longman dictionary of English language and culture: Gets to the heart of the language (3rd ed.)*. Edinburgh: Pearson Education Limited.

用語辞典としては上記の3冊を推薦したい。『すぐわかる統計用語』には英語で論文を書く時の基礎知識が付記してある。Longman Dictionary (3rd ed.) は40,000語の語義と15,000の文化的レファレンスボックスを最新化し、アメリカ文化の項目を増やしている。

#### 【高木推薦】

##### 質的研究法一般

Bryman, A. (2001). *Social research methods*. Oxford: Oxford University Press.

比較的読みやすいレイアウトで、量的・研究アプローチ両方の研究手法と論文の書き方を知るためによい参考書である。

Cohen, L., Manion, L., & Morrison, K. (2003). *Research methods in education*. London: Routledge.

理論的視点の解説も含め、研究デザインの立て方、量的・質的アプローチ両方の研究手法が網羅されている。

Holliday, A. (2007). *Doing and writing qualitative research*. London: Sage Publications.

質的研究の初心者と研究者の両方を対象に、質的研究の研究手法から論文の書き方まで事例を紹介しながら、解説している。著者はイギリスの大学の応用言語学部の教授。

Richards, K. (2003). *Qualitative inquiry in TESOL*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

TESOLと応用言語学の分野における質的研究書としてお勧め。

##### 質的研究入門書

秋田 喜代美・藤江 康彦(編). (2007). 『事例から学ぶはじめての質的研究法 教育・学習編』東京図書

質的研究を行おうとしている初学者を対象に、すぐれた研究事例を中心として質的研究の方法や手続

きの紹介・解説がされている。巻末の書籍紹介も役立つ。

Flick, U. (2002). 『質的研究入門 - <人間の科学>のための方法論』(小田 博志, 春日 常, 山本 則子, 宮地 尚子, 訳) 春秋社 (Flick, U. (2006). *An introduction to qualitative research (3<sup>rd</sup> ed.)*, London: Sage Publications.)

質的研究の代表的な技法を網羅しており、それぞれの長短を勘案しながら、比較している。質的研究の入門書としてお勧め。巻末の訳者による日本語文献の紹介と質的研究用語集も役立つ。

Holloway, I. & Wheeler, S. (2006). 『ナースのための質的研究入門 - 研究方法から論文作成まで』(野口美和子, 監訳) 医学書院 (Holloway, I. & Wheeler, S. (1996). *Qualitative research for nurses*. Oxford: Blackwell Science.)

ナースのためというタイトルがついているが、教育学分野の研究者でも大変参考になる。訳出の際の用語解説も親切なので、質的研究の入門書としてお勧め。

波平 恵美子・道信 良子(2005). 『質的研究 Step by Step—すぐれた論文作成をめざして』医学書院  
質的研究についてのエッセンスだけを集約した薄手の読みやすい入門書。質的研究の特徴や成立の背景を論じるとともに、具体的に研究手順を Step ごとに示している。

### グラウンデッド・セオリーアプローチ

Glaser, B. G. & Strauss, A. L. (1996). 『データ対話型理論の発見 調査からいかに理論をうみだすか』(後藤 隆, 水野 節夫, 大出 春江, 訳)新曜社 (Glaser, B. G. & Strauss, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Chicago: Aldine Publishing Company.)

Straus, A. L. & Corbin, J. (2004). 『質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順(第2版)』(操 華子, 森岡 崇, 訳) 医学書院 (Straus, A. L. & Corbin, J. (1990). *Basics of qualitative research: grounded theory procedures and techniques*. London: Sage Publications.)

上記2冊は、グラウンデッド・セオリーアプローチの基本書。

戈木クレイグヒル滋子(2005). 『質的研究法ゼミナール グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ』  
医学書院

戈木クレイグヒル滋子(2006). 『グラウンデッド・セオリーアプローチ 理論を生み出すまで』新曜社  
上記2冊は、グラウンデッド・セオリーアプローチの権威ストラウス氏とコービン氏から指導を受け、看護学博士課程を取得した筆者による著書。具体的事例を挙げながら、大変分かりやすく解説している。

木下 康仁(2003). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂

木下 康仁(2005). 『分野別実践編 グラウンデッド・セオリー・アプローチ』

木下 康仁(2007). 『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂

上記3冊は、グラウンデッド・セオリーアプローチに著者独自の修正を加えた「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」について解説している。

### ケーススタディ

Merriam, S.B. (2004). 『質的調査法入門 教育における調査法とケース・スタディ』(堀 薫夫, 久保 真人, 成島 美弥, 訳) ミネルヴァ書房 (Merriam, S. B. (1998). *Qualitative research and case study applications in education*. (rev.ed.). San Francisco: Jossey-Bass Publishers.)

質的研究法の入門書かつケーススタディについての詳細に解説されている。

### 面接法

鈴木敦子(2005). 『調査的面接の技法』ナカニシヤ出版

面接の技法について詳しく解説。これ一冊あれば、面接法のこと良く分かる。  
Vaughn, S., Schumm, J. S., & Sinaqub, J. M. (1999). 『グループ・インタビューの技法』 (井下 理, 柴原 宜幸, 田部井 潤, 訳) 慶應義塾大学出版会 (Vaughn, S., Schumm, J. S., & Sinaqub, J. M. (1996). *Focus group interviews in education and psychology*. London: Sage Publications.)  
フォーカス・グループ・インタビューについて、教育・心理学などでの応用を中心に理念から準備・実施・分析まで丁寧に解説している。

#### その他

Bailey, K. M., & Nunan, D (Eds.). (1996). *Voices from the language classroom: Qualitative research in second language education*. Cambridge: Cambridge University Press.  
タイトルが示すように、第二言語教育における質的研究論文集。論文の内容そのものが教師にとって興味深いだけでなく、研究課題の設定、データの分析方法、論文の執筆スタイルなどが参考になる。  
Crotty, M. (1998). *The foundations of social research: Meaning and perspective in the research process*. London: Sage Publications.  
理論的枠組みとその哲学的概念を理解したい方の必読書。

#### 質的研究に関する論文

Brown, J. D. (2005). Characteristics of sound qualitative research. *Shiken: JALT Testing & Evaluation SIG Newsletter*, 9(2), 31-33. Retrieved January 13, 2008, from [http://www.jalt.org/test/bro\\_22.htm](http://www.jalt.org/test/bro_22.htm).  
Chaudron, C. (1986). The Interaction of quantitative and qualitative approaches to research: A view of the second language classroom. *TESOL Quarterly* 20(4), 709-717.  
Creswell, J. W., & Miller, D. L. (2000). Determining validity in qualitative inquiry. *Theory into Practice*, 39(3), 124-130.  
Davis, K. A. (1995). Qualitative theory and methods in applied linguistics research. *TESOL Quarterly*, 29, 427-453.  
Edge, J. & Richards, K. (1998). May I see your warrant, please?: Justifying outcomes in qualitative research. *Applied Linguistics*, 19(3), 334-356.  
Freeman, D. (1995). Asking "good" questions: perspectives from qualitative research on practice, knowledge, and understanding in teacher education. *TESOL Quarterly*, 29(3), 581-585.  
Lazaraton, A. (1995). Qualitative research in applied linguistics: A progress report. *TESOL Quarterly*, 29(3), 455-472.  
Lazaraton, A. (2003). Evaluative criteria for qualitative research in applied linguistics: Whose criteria and whose research? *Modern Language Journal*, 87(1), 1-12.